特集 日本技術者教育認定機構 (JABEE) 農学一般関連分野水産系プログラムの課題と展望

プログラム審査試行を終えて—2

渡 辺 悦 生

東京水産大学大学院水産学研究科

Practice and implementation of JABEE Program for Fisheries Science-2
Case Study of Faculty of Fisheries, Nagasaki University

ETSUO WATANABE

Graduate School of Fisheries Science, Tokyo University of Fisheries, Minato, Tokyo 108-8477, Japan

2002年1月9, 10, 11日の予定で、まだ正月気分も抜けきらない中を審査委員5名、オブザーバー3名の合計7名からなる審査チームで受審校へ到着した時は、さすがに全員初めての体験なので緊張した。受審校の先生方、審査チームの先生方には、並々ならぬご苦勞に、改めて心より感謝申し上げる次第です。

受審校側からは、副学長、JABEE対応責任者を始め、就職、学務（厚生補導担当、JABEEプログラム担当）、入試、FD、教員個人評価、広報の各責任者、各コース主任、各講座主任の先生方が対応に当たられ、一方、審査チーム側からは水産化学、生物資源、農学、生物生産、水産学、農学生命科学等を専門とする先生方が対応に当たった。今、思えば、審査チームに企業人の参加がなかったことが悔やまれる。また、大学間のやり取りだけでは馴れ合いになりかねない。民間人（たとえば大学OB）の参加も有効であるように思われた。審査機構を権威あるものにすることが重要である。

本実地審査の目的は、主にプログラム側が作成した自己点検書では読み取れない部分を実地に見聞することによって理解するところにあるわけであるが、それをたった2日間で済ませようとするところに元々無理があることはすでに試行を経験された先生達から知らされてあったので、受審校とは2001年の9月から綿密な打ち合わせを開始した。すなわち、2001年9月1日には審査項目、審査スケジュール(案)を受審校へ連絡し、10月3日には第1回審査チーム打ち合わせ会を持ち、実地審査に向けて概略を検討した。12月7日には審査チームメンバーにプログラム点検書1（実地審査前に使用）の作成を依頼。12月22日には第2回審査チーム打ち合わせ会を開き以下のような詳細を打ち合わせ、2002年1月8日までにプログラム点検書2（実地審査期間中に使用）、同3（実地審査最終面談時に受審校へ手渡す）の作成準備を依頼した。

第2回審査チーム打ち合わせ会内容：

プログラム点検書1の原稿の作成

自己点検書に対する懸念事項についての協議
審査項目と審査スケジュール（役割分担）の協議
実地審査方法（学生の成績の最低合格レベルの判定法、国際的に認知される最低レベル）の協議
面談者（教員、学生、卒業生）の決定
追加提出資料など実地審査当日に準備の依頼をする事項の検討

審査チームの旅行日程（到着、出発）：

到着したその日（1月9日）は資料閲覧を行い、問題点の検討と役割分担の確認および審査認定理念（技術者教育プログラムの継続的改善による質の向上を保証するシステムとプロセスの構築）を再確認してホテルに戻った。

実地審査は主に1月10日と11日の午前中にかけて行われたが、実地に先立って審査委員倫理規定を配布し、立場上得られた情報を口外しないことを誓った。

実地審査の経緯を以下に示す。

審査項目、審査スケジュールの説明

コース主任によるコースプログラムの方針説明

教務責任者によるカリキュラム・教育方法の説明（目標・教育方法との関係、質疑応答）

認定基準分野別要件達成度評価方法の説明（質疑応答）、調査

学生、教職員との面談

講義（シラバス、教科書、試験問題、解答採点例）の調査

実験、演習（レポートなど）の調査

卒業論文の調査

自己点検システムの説明と活動状況調査（議事録などの閲覧）

教員の質的向上のための組織的活動状況の説明と活動記録の閲覧

講義、実験、演習などの視察

図書館、コンピューター関連施設などの視察

プログラム点検書を渡し、1月11日午後2時、公式日程を終了し、帰路についた。

その後、1次審査報告書の作成・審議を経てJABEEへの報告、2次審査報告書の作成・審議（e-mailにて各審査委員の了解を求めた）、3月2日JABEEへ2次審査報告書およびプログラム点検書を提出して当該審査試行を終了した。本来ならば日本水産学会（あるいは水産学関連学会）が認定した審査委員会がこの審議にあたる場所であるが、現在まだ整備されていない。至急に当委員会を立ちあげる必要がある。

今、振り返ってみると、とにもかくにも慌ただしい日程のなかでいくつかの問題点が浮上してきたように思う。

第1点は、水産系技術者教育プログラムの内容はJABEE対応特別委員会を中心に約2年間をかけて検討してきた。そして必要最小限の内容をキーワード的に整備した。しかしながら、それをどのレベルまで習得すれば国際レベルといえるのか、あるいは学生自身がどのレベルまで理解しているか、身につけているか、これを出口で評価しなければならない。課せられた時間数をこなせばすむことなのか、あるいはテストで合格すれば良いことになっているが、はたして倫理のようなものは本人が身につけたことをどのように評価できるのか。JABEE認定校の卒業生の教育レベルは各教育機関間で差のないことが望ましいなどなど、こういった事はこれまで検討がなされていない。早急に検討しなければならない課題であろう。

それでは今回の試行ではこれらの点をどのようにクリアしたのか。最終的には各審査員の経験に基づく自己診断であったがそれらを統一意見として集約した。

第2点は、アメリカにおける本制度は大学を卒業することによって自動的に機能するようなプログラムになっている。しかるに、日本では卒業要件とJABEE対応要件が一致せずJABEEの制度に対応させようとするあまりJABEEコースを別途設置せざるを得ない状況がある。かつ、上に述べたような事も災いして卒業用評価とJABEE用評価を区別するような矛盾が生じている。理想的にはダブルスタンダードは好ましいものではない。

JABEEの精神は能力水準の保証であり、各高等教育機関にあっては自らの教育目標に沿って国際的に通用する教育レベルをいかにして身につけさせるかが重要で、先に述べた技術士補¹⁾の資格が取れる、取れないの問題は切り離すべきであることを明確にすべきであろう。

今、社会が多様化している中、各高等教育機関もそれに対応すべく学際領域をも含めて開講科目が多岐にわた

っている。しかるに、水産教育プログラムは「水産という分野」を学んだ学生にとってこれだけは知っておくべきという「minimum requirement」を要求しているにすぎない。これがクリアできないということは、水産教育に落ち度があるか、あるいは水産という領域が大きく変わりつつあることを示すものと考ええる。ここに、これもJABEEが提唱しているフィードバック機構、すなわち、前述した技術者教育プログラムの継続的改善が要求されるのである。すなわち、基準とも、ものさしとも言われるものはたえず良い方向へ改善されねばならない。これはJABEEが対岸にあって、改善しましたからどうぞではないのである。われわれが一人一人継続的に改善を考えプログラムに反映させなければならない。われわれとは、学会であり、それに所属する会員であり、大学人であり、企業人である。

これまでシステム作りに重点がおかれたのは当然であるが、今後教育に対する学会レベルでの検討が必要であろうし、日本の教育事情にも即した基準作りを検討すべきではなかろうか（卒業論文は非常に良いとする意見が多数あった。正しい位置づけが必要であろう）。

第三の問題点は、現実に各高等教育機関で展開されている教育の実態からみると、一挙に満足な改善ができるとは思わない。たとえ改善・改革がなされたとしても、またそれを維持し、さらなる改善につなげていくための委員会が設けられたとしても、マンネリ化しないか、継続するか、など教官一人一人の理解が得られなければ実行は難しいと思われた。さらに、教官不足の解消、施設・設備の充実、財源の確保などを自助努力によって行わなければならないし、これまで評価の対象として馴染まなかった教官の教育業績評価をどう定着させるかなど問題は山積している。

辛口な反省となってしまったが、わが大学の試行体験もふまえて教育プログラムに要求される基準を真摯に受け止め、教育の改善を継続することの重要性を改めて認識することができたと思っている。不完全でも前進すべきであろう。

JABEE正会員である日本水産学会内に水産教育の中身、レベルを検討する常置委員会の一日も早い設置を期待したい。

文 献

- 1) 渡辺悦生、日本技術者教育認定機構、日水誌 2002; 68: 112-114.